

# I. 国際インド洋観測シンポジウム

主催 日本海洋学会  
水産海洋研究会  
日本プランクトン研究連絡会

主 題 国際インド洋調査才2回観測を終えて  
日 時 昭和39年4月6日 0930~1600  
場 所 気象庁講堂

## 「話題提供者」

- (1) 鹿児島丸関係  
全 般 団員 茶 円 正 明 (鹿 大)
- (2) 耕洋丸関係  
全 般 団員 武 居 薫 (水 大)  
団員 松 本 次 男 (気象庁)
- (3) おしよろ丸関係  
全 般 船長(団長)  
藤 井 武 治 (北 大)
- (4) *IIOE*生物関係  
元 田 茂 (北 大)  
国際会議に出席して  
(インド洋生物センターについて)
- (5) 海鷹丸関係  
全 般 団長 妹 尾 次 郎 (東水大)  
海洋物理 団員 <sup>○</sup>島野次夫(水路部)・奈須敬二(鯨研)  
海洋化学 団員 岡部史郎(福岡大学) <sup>○</sup>山本克己(舞鶴気象)  
海洋生物 団員 妹尾次郎・<sup>○</sup>増田辰良(東水大)  
海洋地質 団員 土 隆一(静岡大)  
生産力 団員 <sup>○</sup>坂本市太郎(三重大)・松生 洽(東水大)  
地球物理 団員 <sup>○</sup>友田好文・瀬川爾朗(東大)
- (6) ARG O号調査に参加して:  
土 屋 瑞 樹 (気象大)

(7) 燐酸および全燐に関するオーストラリアの観測結果：

杉浦吉雄（気象研）

(8) 総合討議

座長 石野 誠

石野 誠（東京水産大学）

## 1. 概 要

1962～1963年の冬季、海鷹丸、耕洋丸およびおしよ丸3隻の調査船をインド洋に派遣し、国際調査に参加せしめたわが国からは1963～1964年には、上記各船の外に鹿児島丸も参加した。このうちおしよ丸は、本国際調査計画船として正式に参加はしていないが、調査方針等すべてこれに準じて調査を行ない、実際面で協力する形がとられた。

1960～1961年の冬、海鷹丸が予備調査に参加して以来、わが国では、主としてインド洋東部に調査の重点をおき、貴重な数々の科学的な資料が入手されてきている。元来この調査は、他の海洋に比して、比較的研究のおくれているこの水域の、海洋学的なあらゆる部門について、研究のメスを入れることになっていた。そのおもな研究課題は、海洋学的に未知な事柄を見出し、産業厚生上に有益な成果を得ること、特にインド洋の生産力を明白にし、卓越季節風によつて変転する海流系との関係、精密な海底地形図の作製等の、広範な調査研究の上におかれ、しかも非常に高度な精密さが要求されていたものである。海洋物理学、海洋化学、海洋生物学、海洋地質学、地球物理学、気象学の基礎科学の研究にとどまらず、海洋の基礎生産力の統一的な測定がなされ、漁業生物の採捕、それらの標識放流も実施されたのである。

各研究分野にわたり、輝かしい調査成果を得て帰国された調査団を迎え、水産海洋研究会は下記のようなシンポジウムを、日本海洋学会、日本プランクトン研究連絡会と共催して開いた。ここにその講演の要旨を掲載するものである。詳細なデータは、各機関から調査概要として報告されており、また近く本印刷されることが期待されている。なお、ここに記載した講演趣旨のうち、松本、奈須、島野、杉浦各氏の分を除き、他は何れも前記概要報告書から、宇田および石野が摘記したものであることを申し添え、関係各氏の御理解御了承を得たくお願いいたします次才である。

### 鹿児島丸関係

(1) 植田総一・狩俣忠男・今井健彦・上野清尚・野村 裕（鹿大）

- (i) 測 深 : 航走中10分おき、停船中30分おきに記録をとつた。総点数5158点。  
(ii) 目視観測 : インド洋航行期間中62日間にわたつて観察した。その結果概要は、